

# 十人十色 適材適所 性別不問

【連載エッセイ】

— 第3回 —

## セカンドチャンス社会へ 女性の再就職を考える

大沢 真知子 ● おおさわ まちこ

日本女子大学現代女性キャリア研究所所長。同大学人間社会学部教授。南イリノイ大学経済学部博士課程修了（Ph.D（経済学））。シカゴ大学ヒューレット・フェロー、ミシガン大学助教授、亜細亜大学助教授を経て、現職。著書に「女性はなぜ活躍できないのか」（東洋経済新報社）、「妻が再就職するとき」（NTT出版）、「日本型ワーキングプアの本質」、「ワークライフシナジー」、「ワークライフバランス社会へ」（以上岩波書店）、「21世紀の女性と仕事」（放送大学教育振興会）など多数。

**結** 婚や出産を機に、仕事を辞める女性が多い日本。そして、いざ再就職をしようとしても、離職期間が

長いほど難しくなる現状があります。第3回は、こうした女性たちが再就職

を果たすためにどんな政策が必要なのかを、アメリカの事例を紹介しながら考えます。

今年の夏は、仕事の方はいっこうに進まなかったのだが、料理の腕だけは上がった。原稿のアイデアは浮かばないのに、毎朝冷蔵庫をのぞいて、そこにある野菜や昨夜の残り物などを見ると、おもしろいようにインスピレーションがわき、さまざまな調理の可能性が頭に浮かんだ。こんなことは今までになかった。

これまで、仕事帰りとなると、あり合わせのもので済ませてしまうことが多かった。また、夫が料理好きということもあり、やっってもらうことも多い。なので、ことさら料理が好きというわけでもない。そんな私が、今年の夏は、料理を作り続けたのは、ネットでのレシピ検索をもとに、そこに私なりの工夫をすることで、オリジナリティを加えられるようになったからだと思う。

例えば、水茄子のつけもの。市販されているものは量が多く、夫婦ふたりで毎日食べると飽きる。しかし、残してはもったいない。そこで、洋風の味付けにして、オリーブオイルをかけてみるとこれがいける。油揚げが残っているので、オーブントースターでカリカリに

焼いてサラダに入れてみるとまた違った味わいになった。キャベツの残り物に軽く塩をふつておき、翌日ヨーグルトであえるとちよっと変わった一品に。さらには、残り物の野菜でマリネを作っておき、これまた残り物の豆腐の上のにせてみたら、これもいける。

レシピを検索してもわが家にはない材料も多い。そんなときに代用できるものを探すのも楽しい。どれも思いがけないおかずに変化をつけて、新しい発見につながる。



## Think outside the Box

デフレ時代には、新しいものを買うのではなく、今あるものを大切にすることで創意工夫を加えることで付加価値を付けていく、あるいは変化をつけていく。そんな楽しい節約生活が求められている。こうした時代にお薦めなのが、固定観念にしばられず、型にはまった考えから少しだけ自分を解放してみることである。英語では、これをThink outside the Boxといい、行き詰ったときの考え方として、薦められることが多い。人生の選択においても、重要な考え方であると思う。この少しずつの工夫がオリジナリティやイノベーションにつながる。

さまざまな可能性や選択肢を考えるときに、思い切って自分がこだわっていることを外から見してみる。本当にそれにこだわる方がいいのか。自分に向いているものは他にあるのではないか。自分が本当にやっていて楽しいと思うときはどんなときなのだろうか。

このような考え方がより大事になるのは、初職の選択よりも再就職時においてである。というのも再就職には専門性が問われるからだ。

## 再就職はセカンドチャンスを得ること

2008年3月にアメリカ大使館と勤務校（日本女子大学）との共催で国際シンポジウムを行った。リーマンショック前後の景気後退期で、その年の初めには、派遣村が日比谷公園に設営され、暗いムードが漂っていた。そんな中で、大使館の方とお話していたのだが、アメリカ社会の良いところは、いつでもやり直しができるところではないかということになった。とくに、結婚や出産を機に仕事を辞めた女性の再就職は、終身雇用制度が揺らぐ中で、非常に重要な政策になっていくのではないかという結論になった。それでは、それをテーマにした国際シンポジウムをやるということの話がまとまったのである。そのときのアメリカ側から提案されたシンポジウムのタイトルがCreating Second Chance for Womenということに落ち着き、駐日韓国大使館も後援してくださった。

再就職をセカンドチャンスと考える見方は、そのときに初めて知った。また、基調講演をしてくださった、キャロル・フィッシュマン・コーエンさんのお話をうかがって、目からうろこが落ちた。

キャロルさんはハーバード大学の経営大学院を出た才媛である。投資会社に勤め、活躍をしていた。結婚して出産し、育児中に勤めている会社が倒産し、行き場を失った。そうこうしているう

ちにさらに3人の子どもを出産、10年以上主婦として子育てに専念していた。再就職をしたのは42歳のときである。

子育てに追われるうちに、新聞を読んだりする習慣もなくなり、経済の状況にも疎くなった。子どもたちの世話に追われているうちに、外見にも気を使わなくなり、流行からも取り残されていったのだそう。

そんなある日、出身校が同窓会を開催し、そこで自分と同じように、再就職をしたいと思いつきながら、果たせない女性たちに出会うことになる。独身時代は、投資銀行の管理職であったり、マーケティングのディレクターをしていたりした女性たちが、長い就業中断期間を経て、再度働くというときになると、みな一様に大きな不安に襲われるという。その不安を共有できたことが、キャロルさんにとって何ものにも代えがたい収穫だったという。

私の勤める大学でも再就職をめざす女性たちのためのリカレント教育課程があるのだが、そこでも同様の声を聞く。同じような境遇の人と出会い、自分の持っている悩みや不安を話すことで、先を見ることができるようになるのだそうである。

Think  
outside  
the  
Box

